

体験型鑑賞教育の研究

— 鑑賞授業「石庭をつくる」をもとに —

緒 方 信 行

A study on experiential appreciation education

— In the art appreciation class “Making the Japanese rock garden” —

Nobuyuki OGATA

(Received October 1, 2015)

1. はじめに

美術科における鑑賞教育は現在いろいろな手法により実践されている。大きくまとめれば、「知識型」「対話型」「クイズ型」などに分類することが出来る。「知識型」は対象となる作品や作家について追究して行く鑑賞法であり、「対話型」は対象となる作品について子ども達が自由に意見を述べ合って各自の違いを認め尊重することを主体とする鑑賞法である。「クイズ型」は提示されたものから同じ作家の作品を探したり作品の一部を隠してそこに何があるかということから主題に迫る鑑賞法である¹⁾。これらの鑑賞法はそれぞれの長所を持ち、子ども達の鑑賞能力や自主的な活動力を高めていくわけではあるが、知識を重視すれば、子ども達にとって退屈で難しい授業になりかねず、また、子ども達の意見を重視して、対象を読み解くことに主眼を置き子ども達の意見を重視しすぎて、鑑賞の内容が子ども達の対話に終始してしまうとなればこれも疑問である。

表題に掲げた「体験型鑑賞教育」とは、教師が提示した題材の投げかけに始まり、実際に作者などいろいろな立場になって試行し、自分たちなりの結論を出した上で、最終的には、専門家あるいは大人としての教師の意見を交え授業を終了するという鑑賞教育の指導法である。現在いろいろと繰り広げられている指導法はそれぞれの手法から子ども達の鑑賞能力向上に努めているわけであるが、ここでは、実際に子ども達が作者や評論家などの立場になって追体験することにより題材に掲げられた対象について理解していくという新しい指導法である。「体験型」と言えば、実際に美術館に出向いて学芸員の話を聞くということなども含められるが、ここでは、自分自身が主体である立場となって体験するという鑑賞法である。

まとめれば、本研究の特色は、対象に関わる作家や審査員など具体的主体人物となって行為の体験を行い、自身の思考を駆使して最終的判断を下すという過程にあり、さらに、専門家あるいは大人としての教師の意見を聞き、自身の判断をより高次へと移すことにある。このような学習行為から、子ども達の自主的な鑑賞への意欲はかき立てられ、次への新たな自発的鑑賞行為へのきっかけをつくることになる考える。

なお、本稿は平成 27 年度受託の科研費にもとづく「体験型鑑賞教育プログラムの開発と実践・評価」の一貫としての研究²⁾である。

2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、「体験型鑑賞教育」が子ども達に能動的な鑑賞の能力を身に付けさせることと、今後の自発的な鑑賞へと発展する効果を生み出すことを明らかにすることである。

そのために、筆者が開発したオリジナル教材「石庭をつくる」の授業実践をもとに考察を行うこととし、事前のアンケートの回答や授業中における学習の様子、また学習シートへの記述などの反応から本研究の目的に迫る

ことにした。今回、授業は都市部と郡部の2校の中学校で実践検証することにした。なお、本教材を開発した当時の筆者の授業や筆者担当の教育実習生による同じ内容での授業も参考にしている。

またここでは、「日本庭園」「枯山水」「石庭」などの言葉が登場するが、無論のこと「日本庭園」は全てを含み「枯山水」は「石庭」を含む名称である。そこで本稿では、子ども達にも分かりやすいようにと便宜上、主に石と砂で構成されたものを「石庭」、草木を有し水を砂で表したものを「枯山水」、そして「石庭」と「枯山水」以外の回遊式庭園など自然を呈したものを「日本庭園」と称することとした。

3. 実践研究

授業実践「石庭をつくる」は、筆者が12年前の平成15年に熊本大学教育学部附属中学校で開発し実践発表した授業（以下、緒方授業）³⁾である。今回は、現附属中学校の村田崇教諭と南関町立南関中学校の吉田香寿美教諭にそれぞれの中学校での授業実践協力（以下それぞれ、村田授業、吉田授業）をお願いした。なお、吉田教諭は大学時代にも筆者担当の教育実習生として同じ授業（以下、吉田実習授業）を行っている。また、授業学年はすべて2年生である。



図1 筆者による「ミニ石庭」制作例

1) 事前アンケート

アンケートは2校とも開発当時と同じ緒方授業のものを実施した。各校の子ども達は修学旅行で奈良、京都方面を訪れる。修学旅行での自発的鑑賞行為も期待して、このアンケートおよび授業は、その事前学習ともなるように修学旅行前に実施した。今回の村田授業と吉田授業に加え、以前実施した緒方授業のアンケートへの回答結果も含め以下記す。

(1) 「日本の美」ということに興味がありますか？

	①とても関心がある	②関心がある	③関心がない
村田授業	5.1	61.5	33.3
吉田授業	6.3	60.0	33.8
緒方授業	15.4	46.2	38.4

（数値は％，以降の項目についても同じだが，項目（4）は人数）

子ども達にとって、都市部と郡部との違いは見られない。12年前の緒方授業については①が2倍ほどの数値を示しているが、3授業とも③の数値はほとんど変わらず3割ほどの生徒が「日本の美」について関心がないと応えている。

ここで、「①とても関心がある」「②関心がある」「③関心がない」という3項目での比較について考えてみると、子ども達は②を①と③の中間値として捉えた感が否めない。「どちらとも言えない」「全く関心がない」などという項目をつくっていれば②の数値は減少していたかもしれない。今後アンケートを行う場合は本項目については、「①とても関心がある」「②関心がある」「③どちらとも言えない」「④関心がない」「⑤全く関心がない」など、質問内容に偏りがないようにすべきであると考える。

本アンケートの両極としての①と③のみを比較すれば、「日本の美」について関心を示さない生徒がかなり多いという結果であると言える。

(2) 「日本の美」について、あなたは？

	①ある程度説明できる	②分かっているつもりだ	③分らない
村田授業	0.0	53.8	46.2
吉田授業	3.8	27.5	68.8
緒方授業	0.0	27.5	72.5

「日本の美」について①の説明できる子はほとんどいないという結果である。吉田授業での①と答えた子も、その説明の内容は「他の国にはない日本固有のもの」「日本でしかできない美術の表し方や色がある」「なごやかでやさしい美しさ、平安時代の女性の貴族みたいな人々」とあり、十分に説明できているとは言えない。また、②と答えた子ども達においても、言葉で説明できないのであれば分らないことと同じであり、「日本美」については、ほとんどの子ども達が理解できておらず、説明となれば全く出来ないという結果と考えて良いであろう。

(3) 近くに見る事の出来る和風庭園はありますか

	①自分の家にある	②近くにある	③ない（と言える）
村田授業	2.6	20.5	74.4
吉田授業	7.5	6.3	81.3
緒方授業	5.0	12.5	---

村田授業では近くにあると答えた子が多いが、小学校の時の見学旅行で行ったのであろう水前寺公園がほとんどで、他に近所の家の庭や熊本城を挙げた者もいた。実はこの項目では「④その他」という質問事項もあったが、該当する子はわずかで、その内容も「分らない」であった。和風と洋風の区別が分らない子もいるということである。なお、緒方授業では③④について記録がない。

(4) 日本庭園を持つ施設で、知っているものは？

	ベスト1	ベスト2	ベスト3
村田授業	水前寺成趣園33	兼六園14	龍安寺9
吉田授業	水前寺成趣園11	龍安寺5	兼六園2
緒方授業	---	---	---

（本項目のみ数値は人数）

日本の著名な日本庭園を持つ施設を15挙げて、知っているものとを尋ねた（複数選択可）が、今回の村田・吉田授業では「龍安寺石庭（京都）」を挙げた子が2割ほどいた。緒方授業では記録がないが、中学校2年生の子ども達は、修学旅行前でも龍安寺の石庭を知っている者は少なからずいる。

(5) 将来、自分の庭はどうしようと思っていますか？

	①洋風にする	②和風にする	③その他
村田授業	56.4	15.4	12.8
吉田授業	51.3	32.5	16.2
緒方授業	---	---	---

将来、自分の家の庭をどうするつもりかという問には、過半数の子が洋風としている。その他と答えた子は「分らない」「決めていない」という回答が多かったが、「マンションに住みたい」という子もいた。将来的に住む家が庭付きとは限らないと思う子も多いようであり、自身の将来設計はまだあまり考えられないようでもある。

(6) 修学旅行での目的や楽しみは何ですか？

	ベスト1	ベスト2	ベスト3
村田授業	友達との親睦 28.2	日本美を体感する 20.5	観光・古き日本…17.9
吉田授業	友達との親睦 26.3	観光 17.6	遊び 16.3
緒方授業	友達との親睦 42.5	古き日本を味わう 25.0	—

本授業後、各校ともに奈良、京都方面への修学旅行が実施されるわけであるが、果たして子ども達における修学旅行の目的は何であろうか。アンケートの結果からは、授業前の段階では多くの子ども達にとって結局のところ友情を深めることが修学旅行の第一義のようである。ただ、村田授業ではベスト3が「観光」と「古き日本を味わう」が同率であり、友達との親睦よりも文化的な観光に興味ある子の方が多いと言える。

2) 授業の実際

以上のようなアンケートの結果を踏まえ、それぞれの授業者による実践を行った。「日本の美」について興味を抱くこと、また、「日本の美」について何かしらの言葉で表現ができるようになることを期待しての授業実践である。最終的には修学旅行で、本授業の対象である龍安寺石庭を訪れたいという声上がることであり、この授業を通して「体験型鑑賞教育」が、子ども達に能動的な鑑賞の能力を身に付けさせ、今後の自発的な鑑賞へと発展する効果を生み出すことが明らかにできれば良い。

授業の学習の流れは各教師に任せた。共通課題としては「ミニ石庭を実際につくり日本美を体感すること」である。

(1) 村田授業

- ①日本庭園を鑑賞する（5分） ②石庭について考える（7分） ③ミニ石庭を実際につくり日本美を体感する（20分） ④龍安寺と班の石庭を比較しそれぞれの良さを感じ取る（8分） ⑤活動を振り返る（10分）

授業開始早々、「今日は実際に石庭をつくります」との教師の言葉を聞いて、子ども達は驚いた様子を見せていた。村田授業の特色は、ミニ石庭づくりに時間をかけていたところにある。「協力する、考えて、平らな状態で、石は重ねない、全体の美を考えて」などを条件として掲げ、いろんな日本庭園の紹介もあったが、時間的に余裕があったためなのか、子ども達は、砂に模様を入れたり、石の個数を増やしたりして、いろんな要素に目が向き、構成はやや複雑なものになっていた。



図2 村田授業 条件のある板書

(2) 吉田授業

- ①前時の和菓子制作を振り返り、「和」について考える（3分） ②外国の庭と伝統的な日本の庭を鑑賞する（7分） ③石庭の作り方や石の配置の方法を知る（10分） ④ミニ石庭を実際につくり日本美を体感する（15分） ⑤各班の石庭を見学し、気に入ったものの理由を考える（7分） ⑥龍安寺の石庭のしくみについて知る（3分） ⑦学習シートに感想を記入し、発表する（5分）

吉田授業の特色は、一つに①で和菓子制作を振り返るところから始まることである。ちょうど、日本の伝統美について学習している中に、本授業が入ってきたのである。また、もう一つの大きな特色として、③で教師が

実際に石庭の作り方を実演する時間が設定されていたことである。子ども達は前に出て来て教卓を囲み、教師の石庭づくりを真剣に見ていた。石庭の砂をまず平らにすることが強調され、実際の石庭づくりでも子ども達は静かに話し合いながら、シンプルなものをつくっていった。



図3 吉田授業 ミニ石庭制作実演

(3) 緒方授業

- ①日本の街並みや庭園を鑑賞する(7分) ②日本庭園のしくみを知り、その美について考える(10分)
 ③石庭について考える(8分) ④ミニ石庭を実際に作り日本美を体感する(15分) ⑤代表班の石庭について感想を発表し合い、自分の意見をまとめる(5分) ⑥まとめ(5分)

前述したとおり12年前の授業である。緒方授業の特色はICTを活用したところにある。日本美に関するものや庭園造りの簡単な仕組みなどをビデオ映像で紹介したり、ビデオで撮った代表班の作品をテレビ画面に映し出して臨場感あるように見せながら、つくったミニ石庭についての検討をさせたりした。学校を挙げた研究発表会の授業でもあり子ども達には緊張感もあったと思われるが、実際のミニ石庭づくりに関しては、静かな中にも意欲的な班活動による制作がなされた。

3) 学習シートに見る感想

学習シートは、授業の展開と同じく各授業者にその内容を委ねた。ここでは今回新たに授業を行った村田授業と吉田授業について、その最終的な感想を抜粋して考察に向かう。村田授業では、学習シートは学習の流れに合わせて作成されており、特徴としては「どんなことに心がけてつくりましたか」と「日本の美についてわかったことを書きましょう」という発問で、美的構成要素に関することと日本の美への理解度を探っている。吉田授業では、学習シートは「わび」「さび」や龍安寺の石庭の具体的な所在や大きさなどについて記録する形であり、辞書的に「わび…「無駄」がなく、簡単で「飾り気」のないこと」「さび…古びて、「枯れた」味わいのあること」と「 」内に記入させて、子ども達に日本特有の言葉をしっかり押さえているところがその特徴である。最終的には「今日の感想」という項目で子ども達の授業に対する気持ちを探っている。

(1) 村田授業

「日本の美についてわかったこと」として、ほとんどの子は何らかの回答を行い無回答は今回の学習者39名中2名であった。「シンプル、でも工夫があるもの」など簡単にまとめたものもあったが、特筆するものを以下紹介する。

まずは日本の美について、①「日本の美はけっして派手ではなく数少ない石でより石庭の広さを強調している。また、質素だけどとても工夫されているいろんな角度で楽しめる」②「「日本の美」というのは、ごちゃごちゃしていないということだ。石を多くすれば多くするほど美から離れた気がした」③「質素だけど華やかな美しさ。誰にも表現できない不思議なアート」④「シンプルに色合いも単純ですが、自然の様子を表現することが日本の美につながるのかなと思います。私たちの班の作品は、あまりきれいではなかったと思います。これは、シンプルではなく自然な川の様子が上手く表現できていなかったからだと思いました」⑤「「日本の美」とは、シンプルだ。ということです。今回私達が作った石庭はとても石が多くごちゃごちゃしています。龍安寺の石庭は、やはりさっぱりしていてきれいだったと思った」⑥「ヨーロッパなどの美はシンメトリーで、きっちりしている美しさだが、日本は、アンバランスなんだけれども、美しさもある不思議な美」

どんなことに心がけてつくったかという問に関するものとして、①「黒色と白色の2種類の石があったのでこの2つをうまく並べて配置しようと思った。また、小さい種類の石を枠として使った」②「全体を見るときに、

バランスがいいようにした」③「石庭の中に川を流している様子を作りたかったため、上流と下流という設定をつくり、それと同時に岩の大きさをかえていくことに心がけました」④「砂によって、自然な感じが出るようにした。また、砂が多い空間をつくることと、石の位置が単に並んでしまわないように意識した」⑤「石の大きさを考えて石と石の距離を心がけた。波もんの形になるように工夫した」

これらの意見からは、自分たちが石を多く使ってしまったって日本的な美を表現することができなかった反省が述べられていると同時に、表現においてはそれなりに構成や主題を考えて意欲的に制作していたことが窺える。

(2) 吉田授業

「今日の感想」という大きなくくりの中にも「日本の美や庭園について興味が湧き、修学旅行でも訪ねてみたい」という気持ちが多く見られた。前述したように「わび」「さび」についてしっかり押さえてあることも、具体的に日本について語ることでできる一つの力となることであろう。

感想を抜粋すると、①「今まで日本の庭に興味がなかったけど、少し興味をもつことができました。ぼくは、日本の庭の落ち着いた感じがいいなと思いました。修学旅行でも訪ねてみたいです」②「一人一人それぞれの石を使ったり、大きさや形をそろえないでキレイにおくということがとてもおもしろかった。龍安寺の庭を作った人もどんな形にしようかと、楽しみながらやったんだと思います」③「自分は、遺跡をイメージしてつくってみました。少し日本庭園に興味が出ました。意外と難しかったけど日本の美を感じました」④「どの石庭にもそれぞれ、石の置き方や砂の模様で、いろんな思いを表現してあるんだなと思いました。また、飾り気のない日本庭園ですが、その中から伝わってくるものは大きいのではないかなと思いました。班で作った石庭も、工夫して作り上げることができました。良かったです」⑤「私は龍安寺に行ったことがあって、1日中ながめていたいなと思いました。今日、石庭を作ってみて、あまりゴチャゴチャせずに、落ちついた感じが出せたかなと思いました。将来、石庭をつくってみたいなと思いました」⑥「私は、和と洋のどちらが好きかと聞かれたら、和と答える人なので、今日の授業で日本の美しい庭を見ることができてよかったです。自分でデザインしてみることもできたので、もっと和について知っていきたいなと強く感じました」

吉田授業では、教師の実演指導もあったためか初めから落ちついた雰囲気の中で、シンプルな美を求めてミニ石庭づくりが展開された。ここには、修学旅行で訪れたい意欲を見せる子の他、龍安寺の石庭をつくった人の思いにまで迫っている子、将来石庭の庭を实际つくってみたいという子まで登場している。



図4 石の個数が多すぎたミニ石庭

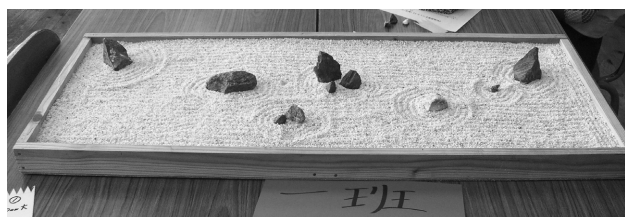


図5 吉田実習授業 構成を考えたミニ石庭

4. 考察

授業で最も大切なことは授業前と授業後の子ども達の変容である。今回の授業実践ではそれぞれの学校で子ども達の大きな変容が見られた。

まず、日本庭園に興味のなかった子ども達が強く関心を抱いたことである。アンケートでは日本の美に興味がないという子ども達が多くいたが、授業中の様子や意見、学習シートへの記録からは、子ども達の強い関心が確認できた。また、各実践校とも修学旅行前の実践授業であったが、修学旅行では龍安寺の石庭を訪れたいという生徒も多く見られるようになった。その一つの要因には教具として使用した石と砂への関心があった。石灰岩の

取れる山から採取される石と砂⁴⁾はそれ自体でも美しいイメージを子ども達に感じさせた。それらの教具を使った「石庭をつくる」という行為は、そのこと自体子ども達の関心を強く誘い、意欲的に活動する場面へとつながったと考える。実際に、授業後の子ども達からはもとより授業者である教師からも、砂の出所について尋ねられるなど、教具としての価値も含め、強い関心を引いた。

ついで、石庭をつくるという体験の場面では子ども達の活動の中に美的構成能力を発揮するという貴重な場面が多く見受けられた。石の大小の選定や石の配置に対して、石庭を見る角度を左右上下と変えたり構成上そこに石は必要か不要かなどを考えたりする姿(図6)も見られ、美術的能力の高まりがそこにはあった。吉田授業では、実際に班でミニ石庭をつくる前に、教師が石庭をつくりながら手順を説明したり石の配置の方法を見せたりしたが、子ども達は教師から与えられた知識をもとに、教師がつくる試作品を見つめている時から、自分なら石庭としての美をどう考えるのかという創造と工夫が始まっていた。また、一旦砂を平らにならして平行な紋様をきれいにつくるという行為が、子ども達の心を落ち着かせ静かなる作業へと導いた。

さらに、授業中に見られた行動が対話の場面である。現在、国語力やコミュニケーション能力の育成が唱われているが、「体験型鑑賞教育」としての各授業ではその場面が多く見られ、子ども達は自身の意見を述べるとともにそれぞれの想いを確認し合っていた。本教材が、コミュニケーションの場をつくり出し、先述の石庭配置の折の構成工夫でも確認し合う姿が見られたように、コミュニケーション能力を高めるためにも有効であることは明らかである。

以上のことをまとめれば、今回の実践授業「石庭をつくる」からは「体験型鑑賞教育」の有用性として、以下のような項目にまとめることができる。



図6 吉田実習授業 構成を工夫する子ども達

(1) 生き生きしてくる

教具の石や砂への関心、石庭をつくるという行為、日本美への関心、班活動による意見交換など、子ども達の意欲的な活動が見られた。また、教師自体も教材への強い関心を示した。

(2) 審美眼が育つ

石庭をどう構成するか、石を選定し、その大小や配置へのこだわりのある構成の様子に子ども達の美的活動と美的判断が感じられた。

(3) 創造し、工夫し始める

美をどう考えるのか、子ども達は教師から与えられた知識をもとに、教師がつくる試作品を見つめるところから、「自分なら」という創造と工夫が始まっていた。

(4) コミュニケーション能力が育つ

「石庭をつくる」という班活動の中で、お互いが意見を出し合いながら思考し、それに対してさらに美的構成を高めていこうとするより高次元の意見交換が全ての班で見られた。

(5) 次への自主的発展へとつながる

学習シートの感想の中には、石庭への興味関心とともに日本庭園に対する自発的鑑賞への意欲や石庭を含む日本庭園づくりなど自主的な将来的活動への発展を意味する意見が多く見られた。

(6) 真実味がある

ミニチュアではあるが、実際の石と砂を教具として使用した。また、授業の感想には「龍安寺の庭をつくった人も…」とある。実材と実体験が、学習における行為の真実味を生み出している。

5. おわりに

今回の試みにより、「体験型鑑賞教育」が子ども達に能動的な鑑賞の能力を身につけさせ、今後の自発的な鑑賞へと発展する効果を生み出すという研究当初の目的は十分に達成することができたと考える。しかし、考察での6つの有用性を掲げることができたが、「体験型鑑賞教育」の一例「石庭をつくる」においてのみ確認したことであり、今後の複数のいろいろな教材の実践で、より明らかなものとしなければならない。さらに精進し、「体験型鑑賞教育」の有用性をより確かなものにしていきたい。

最後に、研究協力者としての村田崇教論と吉田香寿美教諭、そして授業の場を快く用意して頂いた熊本大学教育学部附属中学校並びに南関町立南関中学校に深い感謝の意を表したい。

注

- 1) 鑑賞法として掲げている「知識型」は、いろんなテレビ番組でも取り上げられるような作家、作品研究型である。「対話型」は三澤一実氏（武蔵野美術大学教授）の取り組みなどが挙げられるが、一つの作品を取り上げて、鑑賞する子ども達がいちいち意見を言い合い鑑賞力を高めていく鑑賞法である。「クイズ型」は、一般的に見られる鑑賞法の一つでクイズ的な導入から鑑賞へと子ども達を誘導していく手法である。
- 2) 平成27年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C））を受託。平成27年から29年度までの3年間の研究で、研究課題名は「体験型鑑賞教育プログラムの開発と実践・評価」である。
- 3) 熊本大学教育学部附属中学校平成15年度授業実践研究会で発表した研究授業（題材名「和風庭園をつくる！」）。平成15年9月20日（土）に2年1組の生徒とともに授業実践発表した。
- 4) 熊本県玉名郡玉東町木葉に在る木葉山の麓の石と熊本礦業株式会社が加工した砂を使用した。

参考文献

- 1) 田村剛，1972，作庭記，相模書房。
- 2) 重森完途，1970，日本庭園の思惟〈生成と鑑賞の美学〉，日貿出版社。
- 3) 斎藤勝雄・和田貞次，1970，日本庭園の秘法〈渋さの解明〉，日貿出版社。
- 4) 河原武敏，2001，日本庭園の伝統施設 - 鑑賞と技法の基礎知識，東京農業大学出版会。
- 5) 田中昭三，2002，日本庭園を愉しむ，実業之日本社。
- 6) 吉川登，2011，「行為としての鑑賞」再考 - 鑑賞学の基礎理論の再検討 -，美術科教育学会誌「美術教育学」，第32号，441-452。
- 7) アメリア・アレナス（木下哲夫訳），2001，みる・かんがえる・はなす - 鑑賞教育へのヒント，淡交社。
- 8) 岩本康裕，1990，「分析批評」による名画鑑賞の授業，明治図書。
- 9) 上野行一，2014，私の中の自由な美術 - 鑑賞教育で育む力，光村図書。
- 10) 上野行一，2011，風神雷神はなぜ笑っているのか - 対話による鑑賞完全講座，光村図書。
- 11) 緒方信行，和風庭園をつくる！，2003，平成15年度授業実践研究会 - 授業案集，熊本大学教育学部附属中学校，43-46。